

誰もが手助けしやすい環境づくりが重要

交通バリアフリー法とは

高齢者の方や体の不自由な方、そのほか妊産婦の方などの公共交通機関を利用した移動の利便性及び安全性になります。

交通バリアフリー
教室の開催

このため、沖縄総合事務局運輸部では、平成十三年度から毎年、「交通バリアフリー教室」を開催し、健常者を対象として、高齢者、身体障害者の疑似体験や介助体験を行い、交通バリアフリー



オリエンテーション



活発な意見発表会

についての理解を深めるとともに、ボランティアに関する意識を醸成し、誰もが高齢者や身体障害者等に対し、「お手伝いしましょう」とごく自然に声をかけてサポートできる「心のバリアフリー」を目指しています。

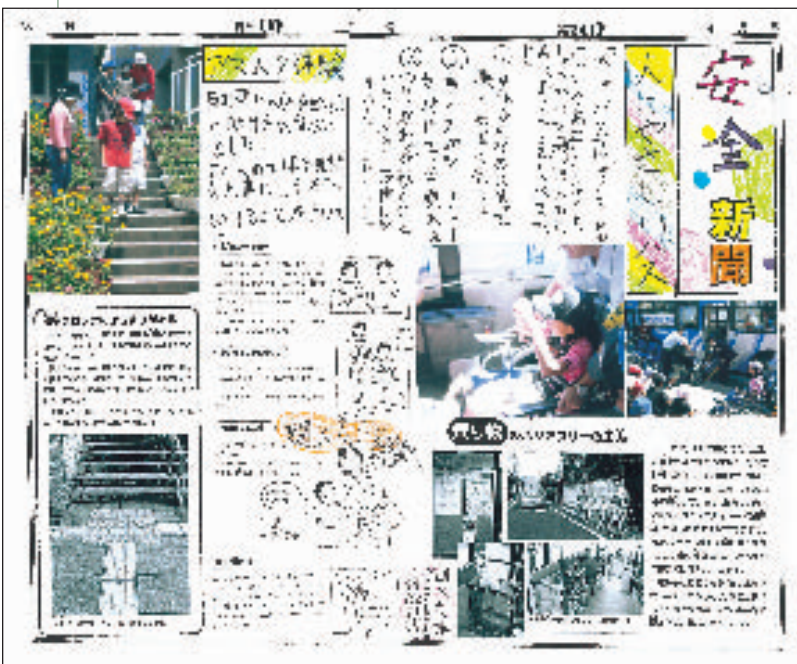
今年度の交通バリアフリー教室は、沖縄障害児教育発祥校（同校第二代目校長与那嶺氏が、明治四十年に五名の盲哑児童を集め、沖縄ではじめて盲哑教育を実施。）である読谷村立渡慶次小学校四年生（九十四名）の「総合的な学習」の一環として、沖縄バス株式会社が路線バスに導入している低床式バスを利用して、七月一日に開催しました。



アイマスクを用いた視覚障害、車椅子を用いた肢体障害、視界の曇った眼鏡や一・五キログラムの重し、耳栓を装着した高齢者の三つの体験コースに二人一組で組み分けされた児童は、校庭内の階段や坂道、校門前に横付けされた低床式バスを乗降すること等により体の自由な人の擬似体験や介助体験をしました。

当日は、当教室の円滑な実施や児童の安全確保のために児童の保護者、沖縄県社会福祉協議会、読谷村社会福祉協議会、読谷村、読谷村教育委員会、バス会社等から多数の方が参加されサポートいただきました。

体験終了後に行われた意見発表会では、「体が不自由な人は、こんなに難しい壁（バリア）を乗り越えているんだな」と思った。「今後は困っている人や悩んでいる人がいたら助けてあげたい。」「車イスに乗っている人や目の不自由な人に便利な環境を作って欲しい。」等活発に感想を述べていました。



児童が作成した壁新聞



児童が作成した壁新聞

体験した児童に対するアンケートでは、本教室で学んだことから、今後、困っている人を見かけたら手助けの声をかけるという児童が九十パーセントを超えています。また、本教室で学んだことを「交通バリアフリー新聞」としてまとめるなど交通バリアフリーに関して継続した取り組みを実施しています。運輸部としては、今後も引き続き「交通バリアフリー教室」の開催を通して少しでも多くの人たちが交通バリアフリーについて理解を深め、また、「人へのおもいやり」「やさしさ」を心感じて今後の活動につなげていく手助けをしたいと考えています。

交通バリアフリー教室アンケート結果
(回答 94 名)

Q 今後、困っている人を見かけたら
手助けの声をかけるとおもいますか？

回 答	回答数(人)	回答率(%)
する	53	56.4
多分する	32	34.0
多分しない	2	2.1
しない	1	1.1
わからない	6	6.4

● 沖縄総合事務局 ●
交通バリアフリー教室
～お手伝いしましょうか～

